

「ひとめ惚れ」の脳メカニズムを知りたい 絵画の中の女性たち

帯広市医師会
JA北海道厚生連 帯広厚生病院

植竹 公明

50歳を超えて初めて「愛」について考えるようになった。特に「ひとめ惚れ」という反射的なマッチングの背景にある脳の神経活動を知りたい。最近の研究では、第一印象を形成するまでの時間は約7秒と考えられているそうだ。当然のことながら視覚入力が第一印象の形成に最も重要な要因である。「ひとめ惚れ」に関連する脳の機能解剖については一向に勉強が進まないのだが、聴覚や触覚の情報がない絵画を見た時の感情は何か参考になるかもしれない。下世話な話だが、そんな好印象の視覚情報を集約すれば、完璧な化粧法などを見つけ出して一儲けできるかもしれない。そこで、今まで印象深かった絵画の女性たちを初めて見た時のことを思い返してみることにした（原画の写真はネットなどで検索していただきたい）。

ラファエロの『小椅子の聖母』のマリアを嫌いな方はいないだろう。すっきりとした顔の輪郭、ふっくらとした唇。聖母子像というよりは、姉弟のようにチャーミングなマリアだ。美しく幸福そうな姿にもかかわらず、誰一人嫉妬する者はいないと思う。女性にも愛される人物画である。聖母には「万人に愛されねばならない」という使命がある。作者は万人に愛される視覚要素を計算しつつ、この絵に盛り込んだに違いない。ラファエロが今も生存していたら、さぞかし売れっ子のメイクアップアーティストになれただろう。

3年前にアンリ・デティエンヌの『娘 あるいはS嬢の肖像』という絵に出逢った。赤いワンピースを着た少女が、何か浮き浮きした表情で誇らしげに微笑んでポーズをとっている。描かれている少女は、おてんばで昭和のコカ・コーラのポスターのようにポップな感じだ。その少女がというわけではなく、その背景も含めた絵そのものが私をドキドキさせた。何より私自身を驚かせたことは「この絵が欲しい!」と感じたことだ。それは今まで経験したことのない不思議な感覚だった。自分のために絵画の複製はがきを買ったのは後にも先にもこの時だけだ。プロの画家になっている幼馴染が「それは絵に恋しちゃったってことなのよ。私なんか日常茶飯事で困っちゃうのよ」と笑っていた。

その絵を実際に見るまで、私はその絵に全く関心がなかった。「有名だから、一応見といてやるか」くらいの気持ちでしかなかった。しかし、初めて『モナ・リザ』の前に立った時、明らかな戦慄を覚えた。

その女性はじっとこちらを見ている。美しくも可愛くもない。少なくとも私の好みではない。微笑んだりもしていない。何も要求したりせずに、ただ黙って見ているだけである。しかし、「何かしてはいけないことを、この女性のためにしてしまうのではないか? 私の全てを失うのではないか?」という不安におののいた。ここにはいけない。でも足が動かない。金縛りになって血の気が引いていく…。

「どうだった?」と妻の声で我に返った。人混みに押されたのか、いつの間にかその部屋から抜け出していた。喉がカラカラに乾いていた。何なんだ、この感覚は!? それは明らかに恋愛感情ではない。しかし、何か強烈なものが私の中で燃え上がっていた。言葉では表現できない激しい感情だった。「二度と会ってはならない」と分かっている、翌早朝もルーヴルのピラミッド前にまた並んでいた。妻には一言だけ、「魔性の女」と答えた。

「感情」にまで深入りしたら、「ひとめ惚れ」の神経機能解剖の解明はさらに複雑になっていく。まったく共通点のなさそうな、たった3人の人物画だけでも、ここまで異なった感情で翻弄されてしまう。「ひとめ惚れ」のメカニズムの解明はますます迷宮に入り込んでいくのに、「浮気心」の脳メカニズムも気になりだしてきた。



オルセー美術館から望むルーヴル美術館